

# 書評 栗原敦著 『宮沢賢治探究』（上・下巻）

土 屋 聡

二〇二一年の七月から八月にかけて、実践女子大学名誉教授・栗原敦先生の新著『宮沢賢治探究』上下巻が蒼丘書林から相次いで刊行された。宮沢賢治関係を主とした著書としては前著『宮沢賢治 透明な軌道の上から』（一九九二年八月新宿書房）からおよそ十九年の間に発表された文章を中心に収め、上下巻それぞれが（前著と同じく）四五〇頁を越える大冊となった。前著の「あとがき」には一部の章を除き「宮沢賢治の〈詩〉を中心とした文章で本書を構成」し、「原点ともいえるべき「序景」から最後の到達としての「文語詩稿」に至る全体を通じて、その思想と表現における生涯の軌跡を時代と環境の中に究明しようと試みた」とあり、新著上巻の「はじめに」には「ここに収めた文章は、長きにわたり、種々の場面に従って書き継い

だものですが、大まかな類別によって配置することになりました。」とし、上巻には「思想と信仰」、下巻は「表現の論理」と副題がある。それが示すように新著でも同じ究明の意識を持ち、詩のみならず童話、少年小説や書簡や伝記資料など、さまざまな角度から宮沢賢治を探究された歩みをまとめられたものとなった。本誌「実践國文學」にて発表された本格的な研究論文のみならず、「種々の場面」に求められた文章もあるためそのスタイルもまた多彩で、例えば日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』（八木書店 二〇一五・二）では宮沢賢治の思考と思想の変容と、表現の営みのありようを次のように簡潔に言及する。

文学的表現者が言語を用いて表出する表現過程の全て、すなわち初源から推敲・変貌・転生等の全段階を

うかがうに足る材料が、宮沢賢治の場合、著者本人の意思とそれを深く理解した遺族の献身的な努力に守られて今に遺された。宮沢本人の意思は、おそらく、いまここにある自己は、限られた現実的な自己であるとともに、無限の過去から無窮遠の未来に続く諸々の関係の結び目のごとき現象であって、その探究はそのままたんとして生きる行為にも等しく、かつ生命や宇宙の生成の本質とも重なるべきものと受けとめていたと見える。そのゆえにこそ、書くことが生きることであるような、おびただしい作品生成の現場をかたちとして遺すことになったのだと思われるのである。(下巻I—1「表現過程論の試み 組版印刷から見えるもの、宮沢賢治の草稿と表現過程」二四頁。)

探究の対象と見た場合の宮沢賢治はあまりにも複雑な存在である。日常的な信仰と意識化した仏教とに深く関わり、時や空間という、いわばミクロな状況が無限に近く多層に重なりつつ、総体としてマクロを形成するなかに「自己」を見出し、その個の意識の中に「生命や宇宙の生成の本質」が「重なるべきもの」とうけとめつつ、そこには詩や童話といった作品の生成が関わるのである。三七歳と若くして亡くなった賢治と生前に関わりを持った人々の多くは存命であった、という幸運と共に、その探究はともすれば現実

にも影響を及ぼしかねないという難しさも抱えていた。よく知られるように生前に刊行されたその著書は『春と修羅』(第一集)と『注文の多い料理店』のみ、雑誌への作品発表も確認できるが折に触れて書き改められた宮沢賢治作品の多くはその死後、草稿の形で残される。代表作の一つとしてよく知られる少年小説『銀河鉄道之夜』もある時期までは、現在からみればいくつかのヴァージョンのテキストが整理されずに流布する、という問題があったが、その本文の生成過程について宮沢賢治を総特集した一九七〇年七月の「ユリイカ」誌上にてフランス文学研究者でもある入沢康夫、天沢退二郎による詳細な討議・再検討が行われたことを一つの端緒に、草稿を元とした賢治作品のより精緻な作品生成のありようの全体を求めて校訂の見直しが行われ、その成果と地道な関連資料収集の成果とを合わせ、『校本宮沢賢治全集』(一九七三・五—一九七七・一〇、筑摩書房 以降『校本全集』と略す)が登場し、本格的な研究の基盤が整えられた。栗原先生は一九九五年五月から始まる『新校本 宮沢賢治全集』(二〇〇九年三月 筑摩書房。以下『新校本全集』)に編纂委員として新たに加われ、『校本全集』の修訂・増補にあたられる。

下巻の「はじめに」によれば、栗原先生が宮沢賢治作品と深く接するようになったのは、筑摩書房の昭和四十二年版

全集の購読がきっかけという。新著の上下巻にそれぞれ付された「はじめに」からは、分銅惇作や入沢康夫、天沢退二郎など栗原先生にとつていわば宮沢賢治への探究の先達となつた人々の論考や、吉本隆明や三浦つとむ、時枝誠記の言語過程説など、大学在学中から先生が関心を持ち、その探究の方法に深く影響をあたえた人々の存在の一端を窺い知ることできる。また、

自身としては、出来る限り、論究がいつそう細部の襞【ひだ】にまでに行き渡るように、対象が生きた現実の見過【みか】されてきた接触面などが、思想や信仰の、行動や感情の生成や構築に、作品の生み出されてくる経緯に、いかに深く関わっているかを解きほぐしていきたいと心がけました。（上巻「はじめに」五頁。）

と探究の姿勢について述べる。新著二冊の構成を見れば、上巻は「思想と信仰」「書簡と事蹟 探究と考証」「拾遺 初期論考」、下巻には「表現の論理 童話・散文探究／詩探究」「拾遺」として、また上下巻にわたつて「資料と研究・ところどころ」が配されている。これは現在も同名のタイトルで宮沢賢治研究会の機関誌「賢治研究」に連載されており、既発表分から内容それぞれに配列・集成したもので、編纂委員のご経験を踏まえた内容も多い。一例として見れば、「賢治研究」131号（二〇一七・三）所載の「校本全集」

で発表できなかったこと・小沢俊郎さんからうかがつた話」では、大正十年の一月に家族に無断で上京し、前年入会した国柱会の奉仕活動に従い、秋に妹トシの病気の知らせを受けて花巻に帰郷（八月から九月と推定）した「賢治はある女性を知り、近親者の中には、二人の結婚を予想している者も多かったという。その恋が稔らなかつたのは、賢治の生活力のなさを父に批判されたことと、妹とし子の死に遭つたことが主な原因ではなからうかと想像される。」ことを伝えている。これは小沢とともに『校本全集』編纂委員であり、詳細な年譜を編むことになる堀尾青史が一九七六年一月の宮沢賢治研究会大阪支部で講演した概要を小沢俊郎がその著書（一九七六・一〇）を刊行した際に「補注」として加えたものの一部で、翌年十月にその年譜を含めた十四巻で完結する『校本全集』にも含める予定であつたものが、実際に刊行された堀尾の「年譜」にその記載が見当たらないことを起点とする内容で、賢治の弟・宮沢清六が掲載を差し止めたことや、これが盛岡高等農林学校での学友・保阪嘉内と賢治との関係性や書簡の内容と時期をめぐる問題に関り、「銀河鉄道の夜」などをめぐり特定のモデルを想定し、果てはその存在を賢治作品の「読み手」として近視眼的に単純化する見立てに對し、「賢治の表現の営みの全体像」から点検しその可能性が極めて低いこと

も指摘する。保阪嘉内の書簡の時期をめぐる考察に關してはおもに上卷Ⅱ—2「表記と用字、あるいは時期推定書簡存疑」、「銀河鉄道の夜」については下卷Ⅰ—7「銀河鉄道の夜」最終形の生成と、「(或る農学生の日誌)」（初出は本誌84号 二〇一三・一〇）などでより本格的に扱われている。『春と修羅』を構成する心象スケッチが生成されつつある時期、宮沢賢治がおそらくは一年ほどの間に「結婚」を意識した異性が実在した事実の重要性と、大正十一年十一月のとし子の死があたえた衝撃の強さがやはり計り知れぬものであったことを伝えるが、一方で早世した賢治をのぞいた関係者にはその女性の係累を含め一九七七年当時まだ多くが存命かつ地域に根差した生活があり、「研究」を盾にしてもすれば個人の私的領域に累が及ぶ事態が生じぬよう配慮してきた宮沢清六ら『校本全集』編纂委員や諸研究者の、宮沢賢治をめぐる人々やその資料を持つ人々への姿勢を知ることでもある。『校本全集』を引き継ぎつつ『新校本全集』の編纂委員に加わられた栗原先生はその姿勢を継承され、先達たちのみならず、ともに宮沢賢治を探究する人々と築いてきた信頼関係が、半世紀にわたるその歩みを支えていることも新著の端々から伝わる。先にも触れたが上下巻の文章は掲載先の目的や性質により事項への扱いや踏み込みに差異もあるため、様々なつながりと補

いを見出せるよう所々に附記を施されている。書簡等の資料をはじめとし、また多様な「事蹟」のもつさまざまな可能性を綿密かつ網羅的に「考証」し、その深い関わりを踏まえ、詩や童話など賢治が作品に「表現」した「論理」を検討し判断の偏りを厳に慎まれつつ、宮沢賢治の多層に響きあう思想と思考と表現とを多角的かつ柔軟に究めてゆく栗原先生の研究が縦横に結実した新著の諸篇から知り、学ぶべきことはまことに多い。宮沢賢治を探究するそのしなやかで強靱なあり方は栗原先生のお人柄とも深く通じている。

栗原先生は下巻の「あとがき」の最後を「ここにまとめたいのは途上でであり、これからも探究が続けられますよう、努めたいと存じます。」と結ばれている。新著の豊饒な実りに感謝しつつ、栗原先生のさらなる歩みをうかがえる新たな機会を心待ちにしている。

(つちや さとし・実践女子大学非常勤講師)